

## 江戸遺跡出土漆器の研究

## Study of excavated lacquer ware in Edo-period

都築 由理子 (Yuriko Tsuzuki) 指導：谷川 章雄

## 研究背景

1970年代後半に東京都心部の再開発により起こった近世都市江戸の考古学は、近年では個々の遺跡の出土遺物を集成・分類する段階から脱し、前時代、次時代とのつながりの中で都市江戸をとらえる動向が生まれている。他時代に比べ出土遺物の量が多い近世遺跡では、遺物の研究が統計的・量的に分析されることもある。出土漆器研究においても同様の分析を行う場合があるが、有機質である漆器は土壌の堆積環境に左右されるため、多くの研究が行われるには至っていない。さらに、近年の北野信彦氏をはじめとする自然科学的な漆器研究で、塗膜分析や顔料分析で得られた結果が、考古学的観察により器種分類された個々の漆器資料に反映されず、復元される漆器観が一致していない点が問題として挙げられる。加えて、近世漆器研究は、陶磁器とともに食膳具として食生活史を担うにも関わらず、漆器のみの研究に始終していることも問題である。出土遺物が多い近世遺跡の特性にも関わらず同じ遺構や遺跡より出土した遺物から江戸の食文化を含む生活史の復元をする際の、総合的視座が欠けていると考えられる。

## 研究目的

以上の問題意識に基づき、近世江戸の生活史の復元、特に漆器の分析により食膳具の様相を明らかにし、有楽町二丁目遺跡出土漆器資料の位置づけを示すことを本研究の目的とする。

## 研究方法

対象資料は、千代田区有楽町二丁目遺跡出土漆器資料265点、千代田区紀尾井町遺跡出土漆器資料24点、千代田区尾張藩麹町邸跡出土漆器資料10点である。研究方法は、蛍光X線分析装置による顔料分析、漆塗膜断面観察のためのプレパラート作成と顕微鏡下での検鏡、目視による器種の分類、塗り色・文様の観察である。

## 研究結果

考古学では、遺物の内容により遺構や遺跡の性格を推定し、生活の復元をおこなう。漆器は、民俗調査により、使用される場面や用途が類推できる。例えば、内外面ともに赤色漆が塗布された漆器は、主に階層上位者により、宴会などのハレの日の食器として使用され、内外面ともに黒色漆が塗布された漆器は、不祝儀の席に用いられるということが明らかにされている(須藤2010)。さらに工芸史では、

漆器の下地に使用される素材や下地と土塗りの塗布と研磨が繰り返され複数層が形成されたものほど高級品である(松田1964)とされている。

分析資料からは、ハレの日に用いられる内外面ともに赤色、黒色漆が塗布された漆器は飯、汁、平、壺碗であり、下地には堅牢な鋳物原料を用いていたことがわかった。日常生活に用いられる飯碗、汁碗は安価な炭粉下地のものが多数を占め、明らかに素材に格差が認められた。

## 考察

有楽町二丁目遺跡出土漆器資料と紀尾井町遺跡、尾張藩麹町邸跡出土漆器資料の器種組成の比較からその変遷を考察した。中世の漆器構成は入子状の三重碗形式で、近世の漆器構成は飯、汁、平、壺碗が揃う四碗形式であるといわれている。有楽町二丁目遺跡資料は、飯、汁碗だけでなく碗漆器皿が検出されたことから、17世紀前葉までは中世的な三重碗形式が残っていた可能性があることを示している。また、数点ではあるが、平碗、壺碗も検出されていることから、四碗形式の使用も認められた。

## 結論

有楽町二丁目遺跡漆器資料から復元される17世紀前葉の食膳具の様相は、ハレの日に用いられる食器に鋳物原料下地の技法で製作された飯、汁、平、壺碗の四碗形式を使用し、日常生活に用いられる食器に炭粉下地の技法で製作された飯碗、汁碗、碗蓋の三重碗形式であったと考えられる。また、本資料を中世から近世への食膳具構成の変化に位置づけると、中世的な三重碗形式から近世的な四碗形式への過渡期に位置づけられる。17世紀代を通して入子状の三重碗形式の使用が存続し、17世紀初頭から前半までは四碗形式がハレの日の食器で限られた使用者層に使用されていたと考えられる。武家地である有楽町二丁目遺跡で17世紀前半に四碗形式がみられた理由もその一つであろう。本資料では、ハレの日の食器にも関わらず、安価な炭粉下地技法の碗がみられたことから、17世紀代は製作技法と場面や用途に適した品質の碗を用いることが混在し、多様な様相を示すものであると考えられた。

## 引用文献

- 須藤護 2010『木の文化の形成－日本の山野利用と木器の文化』未来社  
 松田権六 1964『うるしの話』岩波書店